

にじのお祝い

一宮東部小・4 竹野 美凜

「いたい、いたい、首がいたいよう、うわああああん。」

ある日、わたしはふとんの中で大声を出して泣いていた。首がズキズキといたみ、動かすのもつらく、こわくなった。お母さんはわたしのおでこに手を当てる熱をかくにんして、首をさわって一しゅん止まり、とても心配そうな顔をしていた。何日も前から高熱が続いている。

次の日、お母さんがいつもの小に科へ連れて行ってくれた。先生は長い間、お母さんと話をして、わたしの首をさわった後に、いつもとちがう顔つきでゆっくり言った。

「今から市民病院へ行きましょう。」

先生からつらい事を言われた気がした。

「大じょう夫だよ。がんばるんだぞ。」

とやさしく言ってくれた。でも、今から行く市民病院の事を考えると不安とつらさと首のいたさで心がすなのしろの様にくずれ落ちていった。

市民病院に着いたら、お母さんはわたしをおんぶして病院の中に入ってしまった。病院の中はとても明るく、光がまぶしく、白く、天国みたいでさらに不安になった。大きなベッドにねかされて改竄されるのかと思った。注しややけんさがたつまきのように始まった。見たこともない大きな機械に入れられた。

しん察室に入り、先生に言われた。

「川さき病です。入院して、治りようしましょう。」

お母さんは不安そうな顔をして、

「そうですか・・・。」

と言ってうつむいていた。わたしの目にはなみだがたまって、あふれてきた。そんなことは聞きたくなかった。入院なんてしたくない。

家に帰って、家族といたかった。その時、先生が、

「入院がんばろうな。ぜっ対に大じょう夫だからな。ぼく達がちゃんと治すからな。」

と言ってくれた。安心はした。でも、やっぱりこわくて、悲しくて、不安だった。

入院生活は本当につらかった。始めの数日はうでに点てきのはりがささっているの、かん単に動くことができない。起きていても、ねていても、だるくて体に力が入らない。テレビをつけても、いつもはおもしろいお笑い番組も頭の中が空っぽになってしまったみたいで面白く感じない。何をしてもつまらなく感じる。心の中が真っ黒になっていくみたい。この時が一番つらかった。

だんだん良くなり点てきが外れる日が来た。トイレにも一人で歩いて行けるようになり、体が少しだけ軽くなった気がした。せ中に羽が生えて自由になった気持ちだった。でも、点てきを外した分、さい血の時、うでにはりをささなくてはいけない。わたしは、注しやが大きらいだ。せ中に生えた羽が注しやにもげられたようだ。さい血室に通う時、入院のおともに持つていったぬいぐるみにはげまさないでほしいと考えて乗りこえていた。

入院中は、「わたしだけが取り残された」ような気持ちだった。

毎日がとても速くすぎ、気がつくとすぐ夜になる。それなのに、一週間が全然終わらない。不思議な時間の中にいるようだった。

お父さんとお母さんは交代で付きそってくれた。お父さんは仕事が終わると来てくれた。でも、お父さんが来るとお母さんが帰ってしまう。大大大好きなお父さんに会えるのはうれしいけれど、お母さんには帰ってほしくない。お母さんとバイバイするたびにむねがぎゅうつとなった。

家にはお姉ちゃんが一人でした。ご飯はおばあちゃんと食べていたけれど、きつとお姉ちゃんもさみしくて悲しかったと思う。わたしもがんばるから、お姉ちゃんもがんばってね。そんなふうにも思っていた。

体も少しずつ元気になってきたある日、

「明日けんさして結果がよかったら、たい院かな。」

と言ってもらえた。最後のけんさが終わり、しばらく待っているとドアをノックする音が聞こえ、先生が入ってきて、

「良かったですね。もう大じょう夫。たい院できるよ。がんばったね。」

と言った。本当にうれしかった。飛び上がってよろこんでしまいうだった。

たい院手続きが終わるまでしばらく病室で待っていた時、ふと、まどの外を見ると、空にじがかかっていた。びっくりして、

「お母さん、見て、にじだよ。」

わたしは大声でさけんでいた。

「本当だ。にじがたい院おめでどうって言ってくれているみたいだ

ね。」

目の前が明るく広くなった気がした。今から家に帰るんだと強く思った。

病院の外に出たら、秋が終わって冬になっていた。空気は冷たく、空にはにじ。体力が落ちて歩くだけでふらふらしたけど、心は本当に軽かった。飛べそうなくらい軽かった。にじにたい院をお祝いしてもらった気持ちだった。

たい院して家に帰ったら、お父さんの声もおいも、お姉ちゃんの顔も、リビングもソファもすべてが最高だった。今まで当たり前すぎて、考えたことがなかった。家族四人ですごす時間が幸せで安心できるわたしのたから物だと気づいた。

入院した十日間はつらいことがたくさんあったけれど、その中でわたしは家族のやさしさと病院の先生の「大じょう夫だよ」の言葉の心強さ、健康で元気でいられるありがたさ、じぶんのがんばる力を知ることができた。

先生、治してくれてありがとう。

家族のみんな、ささえてくれてありがとう。

にじを見た日のことをわたしはわすれない。